

熊本震災活動報告 小規模第67報、68報より抜

★第2クール4日目(5月2日)の活動報告

メンバー：活動者6名＋コーディネーター等4名、5月1日よりサポートコーディネーターが変更になっています。

活動：益城町避難所医療福祉出入り団体ミーティング(3名)

あんず：日中支援(1名)、夜間支援(1名)

広安西小学校・中央小学校：様子確認(2名)

ハピネス(福祉保健センター)：入浴介助(2名)

交流情報センター：様子確認等(2名)

<支援内容・活動内容>

◆あんず

- ・1名で終日対応。本日もレクリエーションを実施。利用者、あんず職員と我々との信頼関係が育ってきているように感じる。様々な悩みも打ち明けてもらえるようになってきた。→(1)
- ・あんずのお風呂を活用した避難者の入浴については、あんず職員に情報が浸透しており、今日は来るのか?と訊かれた。→(2)

◆中央小学校

- ・保健師から片マヒの方の男性の件で相談を受ける。避難所を移るにあたり、段ボールベッドにしたいが、つかまって立ち上がりができる手すりがない  
→(3)

◆ハピネス(福祉保健センター)

- ・昨日保健師から依頼のあった要支援の高齢者の入浴を実施。

◆交流情報センター

- ・センター内の要援護者約20名の個別の健康管理票と一覧表を作成し、連携している岩手県DCATつなぐ。

<気が付いたこと等>

- (1) 双方向の関係となるよう支援者とあんず職員との協働関係を今後のクールではさらに作ってほしい。
- (2) 登録利用者だけでなく、避難者や地域住民に目を向けてもらうためにも、むしろ積極的にお風呂を活用させてもらってはどうか(川原氏より)。
- (3) 段ボールベッドは場所を取り、総合体育館に移ると家族三人(老夫婦と息子)が一区画のスペースに入れなくなる。家族がバラバラになるのは嫌なので段ボールベッドにせずこのままでよい、と言われる。

<千葉氏より情報提供>

福祉用具については、専門職に相談してほしい。

5日より岩手チームに保育士が入ってくるので、乳幼児や妊婦などの支援

に活用してほしい。

<熊本大学 石原准教授より>

心のケアに取り組んでいるので何かあれば声をかけてほしい。

★第2クール5日目（5月3日）最終日のまとめ

メンバー：活動者6人+現地スタッフ+コーディネーター3人

議題：4日間を通しての感想、次のチームへの課題など

- ・初日は重装備でどんなことをやるのかと不安の中で過ごした。思っていたよりも宿舎で快適な生活で過ごせて有難かった。テレビで見るよりも実際にみて衝撃を受けた。被災者が前向きだったり、不安を抱えている人などいろいろであった。ピンクの服（熊本 DCAT のビブス・本チームで着用）を着た人を覚えてほしい、会いたい、話がしたいと思ってもらえるように努めたことで、被災者との関係が少しずつできたように感じる。次クール以降にもつながってほしい。どこの誰につなげばいいのかが避難所のなかでよくわからなかった。どこの団体も5日程度で交代するため、支援者共通の課題と感じた。避難している人たちの小さな声をくみ取る仕組みづくりをしていく必要があると感じた。「あんず」については、地域の拠点づくりのため、どんなことに取り組めばいいのか。利用者と一緒に散歩したり、夜勤をしたりして関係を作っていたが、利用者が現在を前向きに捉えていることが印象的だった。職員と支援者との関係づくりを今後どうしていくか。
- ・同じく福島から来て、熊本も報道で知っていた以上にひどい状態と感じた。現地の介護職員へのサポートをどうするかが重要。物資よりも心のケアに今後は力を入れていく必要を感じた。いろんな専門職がいても、うまく機能を発揮できていないと感じた。各団体の役割をお互いに把握し合う仕組みが必要と感じる。今後も時間の経過とともに被災者のニーズも変わってくるし、日常の中でかかわりの中からこちらが気づいていくことが必要。今後も何かの形で自分もかかわっていけたらと感じる。
- ・避難所では各団体が何度も重複して同じことを訊かれることに強いストレスを感じている。情報が錯綜していて、一元化できないかと感じた。
- ・「あんず」について。避難所の被災者に対する入浴がひとつのきっかけになりそう。我々は現地のスタッフの影武者であり、現地スタッフは被災者である、ということを忘れてはいけないと感じる。小規模多機能ができて10年。普段から地域との関係を作必要があると感じた。
- ・「あんず」は普段9名泊まっているが、今は毎日12名が連泊している。職員の利用者との関わりを増やすため、簡単にできるアクティビティを提供。次のクールの人にも引き続きアクティビティに取り組んでほしい。夜勤をして

みると、軽度な方も多く、次クールでは夜間支援についての必要の可否を検討してもよいと感じた。宿直や、時間の縮小でもよいと感じた。(統括コーディネーターより・・・夜勤は関係づくりには有効。本音を聞くことができる。)

- ・「あんず」には玄関先だけしか入っていない。総合体育館をベースに、いろんな避難所に行って少しずつかじって終わった気がする。毎日いろんな状況の変化に追われて日にちだけ過ぎていった気がする。あらためて被災者の支援ってなんだろうと感じた。「なにかしてあげたい」という思いの人たちがたくさん来すぎていて、自分のしていることも押し付けなのではないだろうかと感じたが、入浴の介助で「ありがとう」と言われたことで自分が救われたような気がした。声のひとつずつに答えていくことが必要で、普段の仕事に置き換えて、自分もこれまで自己満足だったのかもと感じた。支援のし過ぎ、やりすぎに注意しなくてはいけない。
- ・いろんな支援者が入れ代わり立ち代わりあいさつをしていて、被災者の気が休まらない。ニーズ調査をしていると今の生活での困りごとを話してもらえて、ゆっくり聞かないと避難している人が本音の部分の話を語ることができない気がした。保健師が中心になって支援者を振り分けている様子を見てみると、我々は関係ができた人を中心に支援していく必要を感じた。子供からお年寄りまでいる避難所のなかで、気の休まる支援も必要と感じた。

(Co：統括コーディネーター)

第2クールにより、私たちの活動が見えてくるようになってきた。入浴なら熊本県DCATという関係ができてきた。「言ったことはしてくれる」という信頼関係ができてきた。益城町を中心に活動しているが、やはり支援の中心地と感じる。そこを支え切らないと益城町の状況は変わらない。事務所(益城町交流情報センター)に居場所を作れたことで我々の支援が周囲に見えた意義は大きい。「あんず」は利用者も職員も支援者もお互いが緊張していたが、自然な関係が出来つつある。単にルーティンで業務をおこなっている状態なので、支援者の姿を見ながら、少しずつ自分たちの仕事を見直すきっかけになったらなあと感じる。確実に皆さんのおかげで熊本県DCATの活動が前に進んだと感じる。皆さんにもっと役割をはたしてもらいたいところだが、支援者が主人公ではなく「あんず」スタッフが主人公となるべき。避難所の人の支援は本人主体があるべき姿。今回の活動は5月いっぱい。以降は熊本県内で支え合う仕組みが必要。これから1～2週間で熊本チーム(特養や老健も含めて)を集めて体制強化をしていきたい。いろんな専門職が入っているが、本当に支援ができていないか。全部中途半端と感じる。ワンストップの支援のあり方をやっていかないといけない。交流情報センターの事務所にプリンターを設置して基地にしていきたい。他の団体とも連携をとりながら、

避難所をきちんと支え、地域で暮らすことを支えることにつなげていきたい。

※行政からの応援保健師や自治体職員、ニーズ調査をしている団体等の支援者が乱立している状況も踏まえ、活動の際は熊本 DCAT のビプスを着用し、身元を明らかにして活動していることから、「平成 28 年熊本地震緊急時災害介護支援チーム（本活動）」を熊本県 DCAT と合流し、益城町を中心にもとも支援活動を展開している（する予定）。

※今クールより、熊本市北区の「きなっせ」を拠点とする活動に加え、益城町情報交流センター事務室にプリンターを置かせてもらい、機動性を高めることとした。